國學院大學学術情報リポジトリ

中日古典漢詩における「残菊」のイメージ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 韓, 鴿 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001550

中日古典漢詩における「残菊」のイメージ

The Images of Fallen Chrysanthemums Between Chinese and Japanese Classical Poetry

韓　鴿

要旨

周知のように、東晋の詩人陶淵明が描く「菊」は、唐代の文人に愛されて、大いに詩文に詠まれるようになった。そのうち、重陽の節物として満開の菊を詠むことがほとんどであり、「残菊」という題材はあまり取り上げられなかった。一方、唐王朝と同じ時代の平安朝において、文人たちは「菊」のその詩的なイメージという新奇な素材を、熱心に取り入れた。特に、中国であまり重視されていなかった、「残菊」を好み、積極的に詠み込んだ。そして、「残菊」という詩語は、しだいに文学世界に定着していた。

今まで、中日それぞれの国において、漢詩世界「残菊」をめぐって、数多くの先行研究がある。しかし、両国における「残菊」のイメージを研究対象とする論文や著作はかなり少ない。そこで、拙稿では中国の唐時代までの残菊詩と日本平安朝における残菊詩を対象として、表現とイメージの受容と変容を探求してみたい。さらに、中日古典詩歌における「残菊」のイメージの相違点に潜んでいる両国の異なる歴史背景と文芸理論という深層の原因も触れてみたい。

摘要

众所周知,东晋诗人陶渊明独爱菊。唐代文人受此影响,吟咏了大量关于菊的诗篇。其中大多以重阳节盛开之菊为主题,“残菊”题材并不多见。而和唐朝大约处于同一时代的日本平安朝,文人们对“菊”以及菊意象这一新奇素材,特别是对在我国唐代没有引起太大重视,符合日本岛国审美趣味的“残菊”意象表现出了极大的兴趣。至今为止,中日关于汉诗世界中的“残菊”已经进行了多方面的研究。然而将两国的“残菊”意象做为研究对象的论文和著作并不多见。

キーワード：中日　漢詩　残菊　受容　変容

关键词：中日　汉诗　残菊　受容　变容

鉴于此,拙稿以我国唐代及唐代以前的残菊诗,日本平安朝的残菊诗为研究对象,从表达以及意象方面入手探讨日本对我国诗歌的受容和变容,并就两国“残菊”意象差异背后的风俗,宗教,文学理念等深层次原因进行讨论。

1　問題の提起

菊は、中国起源の植物で、漢代の古礼の書『礼記』月令に「季秋之月、菊有黄華」(1)とあるように、季節を告げるという実用価値のある植物として記されている。中国最初の詩集である『詩経』に「菊」は詠まれていない。文学世界に初めて登場したのは戦国時代の詩人屈原の『離騒』(2)であるが、東晋の詩人陶淵明が描く「菊」から、大いに詩文に詠まれるようになった。そのうち、重陽の節物として満開の菊を詠む場合がほとんどであり、「残菊」という題材はあまり取り上げられなかった。筆者の統計によると、『文淵閣四庫全書・漢魏六朝百三家集』、『先秦漢魏晋南北朝詩』、『全上古三代秦漢三國六朝文』という三つの著作では、菊を詠み込む作品は 138 首あるが、「残菊」を詠むのは北周の文学者庾信の 2 首だけである。唐代になると、数が 28 首に上ったが、『全唐詩』の 756 首の菊詩と比べると、多くはないと言える。一方、中国であまり重視されていない「残菊」は日本古代の文人の心を惹き、盛んに賞賛された。

周知の如く、菊は日本固有の植物ではない。日本に渡来した時期については、まだ定説がない。一般的には、奈良時代日本に伝来したようであるが(3)、仁徳天皇(4)の頃に薬用植物として百済より、また桓武天皇(5)の時、中国の唐代から渡ったなどの諸説もある。日本現存最古の漢詩集『懐風藻』（751 年）には、菊を詠じた詩が六首見出されるが、「残菊」を詠むものは一首もない。『万葉集』にも、160 種余りの植物が詠まれているが、菊を取り上げた歌は一首も見えない。勅撰三代集『凌雲集』『経国集』『文華秀麗集』にも 24 首の菊詩があるが、「残菊」の姿は見られない。『和漢朗詠集』には中国漢詩

(1)阮元(校刻)(1980)『十三経注疏・礼記注疏』巻十七、中華書局、pp.1379。
(2)屈原(前 343-前 277？)の『離騒』に「朝飲木蘭之堕露兮、夕餐秋菊之落英」がある。
(3)渡辺秀夫(1995)『詩歌の森―日本語のイメージ』大修館書店、pp.260。
(4)仁徳天皇は生没年不詳、記紀では第十六代天皇、5 世紀前半の天皇とする。
『和漢三才圖會』・巻 94 本・濕草類に「按仁德天皇七十三年、始渡異朝青黄赤白黒菊也…」、原文は『古事類苑』植物部・14・「菊」条による、pp.693。
(5)『年山打聞』・上・菊の歌に「万葉集に一首も見えず、…称徳光仁の御代、或は桓武のころなど、もろこしより菊のわたりたるにや…」、原文は『古事類苑』植物部・草十四・「菊雑載」条による、pp.687。

を除き、「残菊」詩はただ1首に過ぎない。漢詩世界ではじめて「残菊」を詠んだのは菅原道真であり、その作品集『菅家文草』や『菅家後集』には16首の残菊詩がある。また、「残菊」が多く詠まれたのは『本朝文粋』『本朝無題詩』『雑言奉和』であり、それぞれ11首、17首、15首を数える。その他、平安時代では、残菊宴もしばしば開催されていた。すなわち、日本の漢詩文化における残菊詩は、平安朝に興隆を迎えたといえよう。

このように、日本における漢詩世界の「残菊」と中国詩歌の「残菊」とは深い関わりがある。中国に起源を持つ菊であるが、中日両国の異なる時代背景と文化背景の影響で、それぞれの「残菊」詩が生まれた。本稿は、中国側の「残菊」から、日本漢詩の「残菊」への変遷をたどり、どのように受容と変容をしたかを考察してみたい。また、変容の背後に潜んでいる原因を解明しようと思う。

2 中国古典漢詩に見られる「残菊」

花としての菊は『詩経』に見えないが、戦国・屈原の『離騒』から、「菊」が中国の文学に登場した。筆者が『文淵閣四庫全書・漢魏六朝百三家集』、『先秦漢魏晋南北朝詩』、『全上古三代秦漢三國六朝文』を調べたところによれば、漢時代では、菊を詠む人は漢武帝劉徹、漢昭帝劉弗陵、揚雄だけである。魏晉南北朝になると、その人数は77人に上昇し、隋時代では再び2人となった。ところが、「残菊」を詠じるのは北周における文学者庾信の1首[(6)]にすぎない。以下はそれを見てみよう。

秋日

蒼茫望落景、羈旅對窮秋。

賴有南園菊、<u>**殘花**</u>足解愁。[(7)]

既に先学[(8)]が指摘したように、唐王朝の太宗李世民が詠んだ「賦得残菊」（『全唐詩』巻一）は中国における「残菊」の初出である。ところが、以上の庾信の詩には、「残菊」という詩語が明らかに詠まれていなくても、「窮秋」という時節を提示する語彙から、「殘花」も「残菊」のイメージを詠むものがある。

(6) 本稿にはただ「残菊」あるいは「残」で菊を詠む作を統計するが、「衰菊」、「老菊」などを入れなかった。
(7) 前掲書『先秦漢魏晋南北朝詩』、pp. 2406。
(8) 本間洋一氏の「菊の賦詩歌の成立」、高兵兵氏の「菅原道真詩文における＜残菊＞をめぐって」などがある。

その意味では、庾信こそは中国における「残菊」詩の第一人者と言えよう。

唐代はどうであろうか。『全唐詩』は、詩の黄金期であることから、唐詩の全貌をうかがわせるものとされる。そのうち、菊詩は 756 首あり、「残菊」を詠む詩と「残」という表現で菊を詠む詩は、全部 28 首ある。魏晉南北朝よりは多いが、『全唐詩』の作品数から見れば、かなり少ないと言える。以下はその内訳を整理したものである。

表 1

	人数	回数	詩題としての「残菊」	詩句にある「残」
初唐	2	4	1	3
盛唐	3	4	0	4
中唐	5	7	0	7
晩唐	13	13	1	14
計	23	28	2	28

表 1 から分かるように、「残菊」を詠む詩人は 23 人で、『全唐詩』全体の 2200 人余りからすると、決して多くはない。また、晩唐の 13 人は、「残菊」を詠む詩人の、ほぼ全部の半分を占めることがわかる。また、詩題としての「残菊」はわずか２例に対して、詩句にある「残」で菊を詠むものがほとんどである。ここから、「残菊」という詩語が唐詩では十分に定着していないことが窺える。

〈中国古典漢詩における「残菊」のイメージ〉

①　「残菊」と望郷の情

梁の庾信(513-581 年)は西魏に使者として赴いたとき、梁は陳に亡ぼされ、また西魏も北周に亡ぼされて、そのまま北周に留まったという曲折の多い経歴がある。「信雖位望通顯、常作鄉関之思、乃作『哀江南賦』以致其意」(9)といったように、故園梁を失った作者は詩文によって、頻繁に望郷の情をうたい上げている。「残菊」詩において、「秋日」の「蒼茫望落景、羈旅對窮秋。賴有南園菊、殘花足解愁」という詠作がある。異郷でひとり暮らしをしている人にとって、秋の夕暮れどきはひときわひと恋しい。幸いなことに南

(9)『北史』巻 83・列傳 71・庾信、また『周書』巻 41・列傳 33・庾信に同じものがある。

園に菊の花がなお咲き残っている。陶淵明「雑詩二首」の「秋菊有佳色、裛露掇其英。泛此忘憂物、遠我遺世情」には「菊」が「憂いを忘れる物」として詠まれる。庾信もこのような認識を念頭においただろう。「残菊」に気持ちを向け、故郷喪失の情、羈旅漂泊の悲哀などの愁いを忘れたい心が見られる。

次に、李郢「早發」の「野店星河在、行人道路長。孤燈憐宿處、斜月厭新裝。草色多寒露、蟲聲似故郷。清秋無限恨、殘菊過重陽」(『全唐詩』巻八八四)は旅中において、重陽を過ごすことへの恨みが詠まれる。また、秋の露が置く朝、夜も明けやらぬころの旅立ちは、一層愁い深いものであろう。しかも、故郷の物音と似ている「蟲聲」が聞こえ、望郷の情は一段と切なるものとなった。めでたい重陽も過ぎて、肉親と会えない恨みを「残菊」に託して詩人のたえがたい孤独感を暗示した。

最後に、晩唐の司空図は「詩人自古恨難窮、暮節登臨且喜同。四望交親兵亂後、一川風物笛聲中。菊殘深處回幽蝶、陂動晴光下早鴻。明日更期來此醉、不堪寂寞對衰翁」(『全唐詩』巻六三二「重陽山居」)という「残菊」を詠み込む重陽詩がある。これは、戦乱相次ぐ晩唐の世相を背景に考えると、よく理解できる。詩人は「兵亂後」の惨めさと「蝶恋花」の美しさという強烈な比較によって、乱世に生きる自分が他郷に流浪することへの悲しみ、さらに国家の運命への不安を詠み、それによって、残菊のイメージは芸術的に一層の高まりをみせた。

② 「残菊」と別離の情

伝統的な中国詩には、別離に際する作品が多い。別離の悲しみと秋の悲愁とが重ね合わされることもある。そのうち、重陽後の別離詩はよく「菊」、あるいは「残菊」と相まって詠まれる。例としては、鄭谷「十日菊」の「節去蜂愁蝶不知、曉庭還繞折殘枝。自縁今日人心別、未必秋香一夜衰」(『全唐詩』巻六七五)という詠作がある。周知の如く、重陽は、親友や家族と集い、だんらんする日である。この日に、人々は、連れだって小高い丘や高い楼台に登って晩秋の風景を遠望しながら酒宴に興じ、また赤い実をつけた茱萸の枝を頭にかざし、香り高い菊の花びらを酒杯に浮かべて飲み、そして長寿をこいねがい、邪気を祓い災厄を除くことを常とした。しかし、楽しい一日の後、翌日の別れは誰にとっても、堪えられないことであろう。詩人は昨日まで一緒に賞翫していた菊を「残菊」と呼び、その苦悶と名残惜しさを詩に託すのである。

また、李嘉祐「送裴五歸京口」の「君罷江西日、家貧為一官。還歸五陵去、只向遠峰看。暮色催人別、秋風待雨寒。遙知到三徑、唯有菊花殘」(『全唐詩』巻二〇六)がある。昔から別れは胸を痛めるものであり、ましてうらさびしい秋の夕暮れ、どうして堪えられよう。しかも、蕭瑟とさびしく鳴る風に冷たい雨も降っている。「残菊」によって、詩人が友人を見送る悲しみと切なさがしみじみと感じられる。そのほか、彼は、「初過重陽惜殘菊、行看舊浦識群鷗。朝霞映日同歸處、暝柳搖風欲別秋。長恨相逢即分首、含情掩淚獨回頭」(『全唐詩』巻二〇七「游徐城河忽見清淮、因寄趙八」)に、別れることを倦厭して、重陽を過ぎたばかりの「残菊」を愛惜する表現によって、別離の思いが断ち切れないことをうたっている。

③「残菊」と 懐才不遇

中国古代において、文学の発展と繁栄の背景には常に政治の助力があり、文人と政治とは切っても切れない関係を持ち続けた。唐王朝では、隋の文帝(541-604 年)から始まった科挙という官吏登用試験によって、人材を選抜した。文人たちは、こういう「鯉の滝登り」と呼ばれる立身出世の道を重んじ、しばしば科挙を受けた。そして、菊が採られないことを懐才不遇に譬えることもあった。「残菊」詩もこれを受け継ぎ、例えば杜甫の「歎庭前甘菊花」では次のように詠まれる。

庭前甘菊移時晚、青蕊重陽不堪摘。
明日蕭條醉盡醒、殘花爛漫開何益。
籬邊野外多衆芳、採擷細瑣升中堂。
念茲空長大枝葉、結根失所纏風霜。(『全唐詩』巻二一六)

『歳時廣記』には、「甘菊平、其葉正月採可作羹、莖五月五日採、花九月九日採、並主頭風目眩淚出、去煩熱、利五臓」[10]という記述があり、甘菊花の採る時期と薬用価値が記されている。また、『杜詩詳注』には、「菊有甘苦二種、甘者可入藥、苦者似菊而非、其名曰薏、所云衆芳細者薏之屬也。移時晚言移植後時根失所謂失其故」[11]とあり、甘菊は移植のため、開花も遅くなって、人々に採られなくなったという。そのかわり、外形が甘菊と似ている薏が採られた。仇兆鼇は「此詩借庭菊以寄慨、甘菊喩君子、衆芳喩小人、傷君子晚猶不遇、而小人雜進在位也」[12]と指摘し、杜甫はこの詠作によって、

(10)前掲書『歳時廣記』巻二十二・端午中・菜菊莖、『文淵閣四庫全書』・史部・時令類。
(11)(唐)杜甫撰、(清)仇兆鼇詳注『杜詩詳注』巻三。
(12)前掲書『杜詩詳注』巻三。

政治の腐敗や自己の不遇の情を歌っていると述べた。ところで、「残菊」について、第四句目の「爛漫」という言葉と上述の甘菊の採る時期から見れば、これは現実的に傷んでいるものではなく、詩人の心理的に損なわれた「残菊」であろう。この点について、高兵兵氏がこの「残菊」を「重陽という一番いい時期を逃した、価値のないもの」(13)として位置づけている。

3 日本古典漢詩に見られる「残菊」

前述の通り、日本現存最古の漢詩集『懐風藻』（751 年）にも、『万葉集』にも、菊を取り上げた歌は一首も見えない。これについて、小島憲之氏は、詠菊が時代差によるものではなく、『万葉集』の歌材の偏向によるものであると指摘した。(14)

平安時代になると、強大な国力を持つ唐王朝の繁栄した文化に憧れ、日本からは十数回もの遣唐使が相次いで遣わされ、多くの留学生や留学僧が中国に赴き、積極的に中国の制度や文化を学んで、中日の文化交流は高まりを見せる。そのうち、中国漢詩における菊とその詩的観念は平安朝に輸入され、文人たちによって、日本漢詩に盛んに詠みこまれた。川口久雄氏が「残菊を賞美するのは唐代の風気をうける。日本ではことにきわだつ風習である」(15)と述べているように、「残菊」という中国であまり取り上げられない風物を日本の漢詩は大いに受容した。

「残菊」が詠まれた主な作品を通覧すると、次のようになる。

表 2

漢詩文集	人数	回数	詩題としての「残菊」	詩句にある「残」
『菅家文草・菅家後集』	1	16	8	17
『本朝文粋』	4	9	3	11
『本朝無題詩』	11	17	6	17
『雑言奉和』	15	15	15	10
『江吏部集』	1	3	2	2
計	32	60	34	57

注:『本朝文粋』には『菅家文草・菅家後集』との重出詩文があるが、それらも『本朝文粋』のなかに計上している。

(13)高兵兵(2006)「菅原道真詩文における＜残菊＞をめぐって―日中比較の視角から」国際日本文化研究中心『日本研究』第 32 期、pp.88。
(14)小島憲之「上代文学の表現をめぐって」『国語と国文学』昭和 41 年4月。
(15)川口久雄校注(1966)日本古典文学大系 72『菅家文草・菅家後集』岩波書店、pp.385。

以上のデータから、人数・回数にしても、詩題の「残菊」あるいは詩句にある「残」にしても、日本は唐代の残菊詩を大きく上回っていることがわかる。また、中国の重陽宴を模倣し、残菊宴もよく開催され、賦詩も不可欠なものとなった。単に「菊」を詠じるだけでなく、「残菊」は賦詩の主題としてもしばしば詠じられるようになった。『雑言奉和』の残菊詩は、寛平元年(889) 9 月 25 日、宇多天皇によって主催された「惜秋翫残菊」を題とする詩宴の作品群である。以上の分析を通して、日本漢詩は、唐代における残菊を賞美する風気を継承し、平安朝の漢詩世界において、「残菊」を詠む風潮が形成されたといえよう。

〈平安朝漢詩における「残菊」のイメージ〉

①　「残菊」への賞賛

『礼記』月令に「季秋之月、菊有黄華」[16]という記録があり、菊は時を告げるものとして理解されていたことがわかる。その後、菊に重陽節のイメージが重ねられていくのも、おおかたの草花が枯れてしまう秋の末まで、霜に抗して凛然と咲くという菊自身の自然的な性質によるものであろう。さらに、「残菊」については、『歴代詩話』に宋・何燕泉が「人之視菊、直繫其時焉耳、当其時則重之、而非為其有所加、過其時則否、而非為其有所損也」[17]と言っているように、詩人たちは菊と重陽とが時間的に密接な関係をもつという点から、重陽の後に、菊が萎れるかどうかにかかわらず、すべてを「残菊」として捉えるのである。このように、もともと菊の外観よりも、その高尚な品格を重視する文人たちは、言うまでもなく残菊の外見を詳しく観察することがきわめて少ないといえよう。それに対して、日本側では、「残菊」の外観への賞美がしばしば見られる。「一叢寒菊咲千金、夜玩殘榮秋欲深」(「惜秋翫残菊、應制、探得深字」、『雑言奉和』七)では、「残菊」そのものに対して、また細部の色・香りなどなどに対しても、ほめ言葉が非常に多いことがわかる。そこから、平安文人たちは残菊の外見を細かく観察して、その自然的な姿をそのまま描くために多様な表現を詠み込んだことがうかがえる。

では、菊の品格はどうのように表現されたのか。まず、「長寿」から見てみよう。『藝文類聚』に「風俗通曰、南陽酈縣有甘谷、谷水甘美、云其山上

(16)前掲書『十三経注疏・礼記注疏』、pp.1379。
(17)(清)呉景旭『歴代詩話』巻五十三・「庚集八」、『文淵閣四庫全書』・集部・詩文評類。

大有菊、水從山上流下、得其滋液。谷中有三十餘家、不復穿井、悉飲此水。上壽百二三十、中百餘、下七八十者、名之大夭、菊華輕身益氣故也」(18)とあるのは、菊水を飲むと不老長寿をもたらすという典故である。中国の菊詩文ではこのイメージがよくうたわれたが、残菊詩には取り入れなかった。一方、日本側において、「惜秋翫残菊、應制、探得稀字」に「憑託秋風留莫散、是尤仙殿萬年暉」(『雑言奉和』一三)と詠まれ、延命長寿のイメージだけでなく、仙人のことも詠み込んでいる。

次は、「高節」である。中国側では、張蠙の「白菊」は遅くまで咲き残っていた白菊の節をたたえた。平安朝でも、「残菊」の高節を讃えることは多い。『本朝無題詩』には、「及寒早悴初冬雪、抱節専凌曉漏霜」(五四・藤原敦基「賦残菊」)とあり、冬の寒さに負けない強さを示し、変わらない花の美しさに貞節を見出している。ここでは、おそらく菊ではなく、「残菊」こそ一年で最も遅い時期に咲くものとみなされたことであろう。また、中国の菊詩で大いに詠まれた「隠遁」について、平安文人も関心を持った。藤原周光の「雲暗水深歸夢斷、唯望籬菊想陶淵」(『本朝無題詩』・一一四)は、陶淵明に関することを「残菊」詩に取り込んで、隠士のような山居生活への思慕が読み取れる。

以上のように、平安朝の残菊詩には中国漢詩からの影響が見られるが、中国と違って、「菊」のもつイメージをそのままを「残菊」に投影して用いていたことがわかる。当時の日本は唐王朝のように重陽節を重要視していないので、菊と重陽節の関係もそれほど密接ではなかった。また、『雑言奉和』に見られる15首の残菊詩は、すべて宇多天皇が開催された詩宴の際、「惜秋翫残菊」を題として詠まれたものである。しかも、菅原道真の残菊詩または『本朝文粋』のものも、その大部分は「応製」という性格をもっている。公宴でも私宴でも積極的に「残菊」のことを褒めたたえる詩を詠む環境にあったと考えられる。これらの詠作は、臣下として己の忠節を誓い、君王など権勢がある人の品徳を称え、あるいは彼らの不老長寿を祈るということを表明する際に欠かせないものと理解できよう。

②「残菊」と君子・女性

三国時代の鍾會は「菊花賦」の中で菊の美徳を以下のように評価した。

夫菊有五美焉。黄花高懸、準天極也。純黄不雑、後土色也。早植晩登、

(18)前掲書『藝文類聚』巻第八十一。

君子德也。冒霜吐穎、象勁直也。流中輕體、神仙食也。[19]

ここは、遅くまで花を咲かせることを君子の品格として称える。その後、淡雅の君子と高潔な隠士という人格的なシンボルは菊文学のテーマとして定着したが、残菊詩にはこうしたイメージは一つも見られない。

日本側はどうであろうか。大江匡衡「初冬同賦殘菊」の「殘菊一叢勝衆花、潔如君子立庭沙」(『江吏部集』一二九）は、「残菊」のことも「君子」と喩え、積極的に取り上げた。藤原敦基「賦残菊」の「艶態空衰同老妓、容輝猶駐似仙郎」(『本朝無題詩』五四)の「仙郎」は「菊」の長寿というイメージを受け継ぎ、そのまま「残菊」に移入した。また、注目すべきのは、「艶」という言葉である。「艶」はなまめかしく、あでやかであること(さま)で、「艶態」はなまめいた姿あるいは嬌態で、一般的には女のことを指す。ここは明らかに美しい菊花の様と女の姿とを重ねている。また、大江匡房「賦残菊」の「畫障尤嫌非艶態、薫爐可恥欠奇香」（『本朝無題詩』六二）も「艶態」を用い、菊の艶やかな美しい様子を美女の姿に譬えた。「初冬遊世尊寺」の「竹苑舊儀煙未變、菊籬殘艶雪難消」(『本朝無題詩』五八二）などが、いずれも「艶」によって、残菊の名残りの色つやを描写した。一方、『全唐詩』には、杜甫「陪鄭公秋晩北池臨眺」の「異方初艶菊、故里亦高桐」(巻二三四)など色のつやという自然特性の「艶」で菊を描くことがあるが、日本側の「艶態」という擬人的な表現は見えず、残菊詩にはどちらも見られない。

また、藤原敦基「賦月前殘菊」の「呉娃迎曉新臨鏡、商老送秋剩戴霜」(『本朝無題詩』六一)の「呉娃」は呉地方の美人で、やはり「残菊」のことを美女に譬えた表現である。「呉娃」について、枚乗「七発」の李善注に「呉都賦注曰。呉俗以美女為娃」という記述がある。『全唐詩』において、白居易「憶江南」の「呉酒一杯春竹葉、呉娃雙舞醉芙蓉」(巻八九〇)などよく見られる表現であるが、菊を「呉娃」と関連付ける作は見当たらない。その他、大江匡房「賦殘菊」の「蘂下綺羅時駱驛、花前冠蓋日相望」（『本朝無題詩』六二）の「綺羅」はあや織の薄衣で、美しい衣服あるいは美しい衣服で着飾った人を指し、これを着る美女を言うことも多い。白居易「清明日觀妓舞聽客詩」の「綺羅從許笑、弦管不妨吟」（巻四四三）と「山遊示小妓」の「本是綺羅人、今為山水伴」（巻四五二）など「綺羅」で盛んな権勢や、衣服を美しく着飾る美女を描くことがあるが、管見の限り、菊詩または残菊詩にこれ

(19)前掲書『藝文類聚』巻第八十一、『文淵閣四庫全書』・子部・類書類。

を用いた例はない。

菊を美女に見立てる表現について、史鑄『百菊集譜』には以下のような論述がある。

> 唐宋詩人詠菊罕有以女色為比、其理當然、或有以比者、惟韓偓歎白菊云:正憐香雪披千片、忽訝殘霞覆一叢。遠似妖姫長年後、酒酣雙臉却微紅。此唐人詩也。又魏野有菊一絶云:正當搖落獨芳妍、向曉吟春露泫然。還似六宮人競怨、幾多珠淚濕金鈿。此本朝人詩也。愚竊謂菊之為卉、貞秀異常、獨能悅茂於風霜搖落之時、人皆愛之、當以賢人君子為比可也。若輒比為女色、豈不汙菊之清致哉？故二詩愚不敢採取以入此詩選、且范文正公賦云:黃中通理得君子之道。魏野又有詩云:易把方先哲。陸務觀詩云:菊花如端人、獨立淩冰霜。凡此等語、比類無不得其宜、故諸篇今預於選中。(20)

ここから、菊がひとり厳霜に立っている姿はあまりにも印象的であるため、人々は次第にそれを捨象して、賢士・君子のシンボルとして認識したことがわかる。また、菊のことを「女色」と見立てることは調和しないようになってゆく。要するに、唐王朝は、菊の品格を非常に大事して、その自身の姿または色は、付属的なものとしておろそかにされた傾向が強いのである。

③「残菊」と郷愁・不遇

前述の如く、中国側の「残菊」詩にはよく「郷愁」「別離」「不遇」などが詠み込まれる。日本側でも、このようなイメージを受け継ぎ、歌われるものがある。

まず、故郷への思いである。菅原道真「對殘菊詠所懷、寄物忠兩才子」の「思家一事亂無端、半畝華園寸步難」(『菅原文草』三〇五)は、京にある留守の家のことを思う心を訴えた。藤原周光の「霜秋旅鬢寒添白、風暮郷心急自絃」(『本朝無題詩』一一四)における「急自絃」は白居易の「琵琶行」にある「却坐促絃絃轉急、淒淒不似向前聲」という詩句の借用であり、ここでは望郷の思いの強さを強調する表現である。

次に、不遇の感である。菅原在良「西院亭即事」の「齡傾官冷老來儒、暫屬詩筵慾課無。晚壇菊殘霜五美、寒林葉脆雨孤株」(『本朝無題詩』三八八)から、年取って恵まれない職にある詩人は、残菊の貞節によって、自分を励ますことが分かる。このように、「残菊」になぞらえ、嘆老と不遇の情を淋漓としてうたうのは学問の神様と呼ばれる菅原道真である。菅野禮行氏は「讃

(20)前掲書『百菊集譜』巻三、『文淵閣四庫全書』・子部・ 譜録類。

岐での不遇を経験した自己を、霜にいためつけられて、なお咲かしめんとする菊に託して自己の貞節の変わりないことを主張したものである」[21]と指摘したように、道真は「残菊」を自分の分身と見なすように詠み込まれた。例を上げてみよう。

殘菊

陶家秋苑冷、殘菊小籬間。為是開時晩、應因得地閑。

唯須偸眼見、不許任心攀。若使風霜怒、當留早老顔。

(『菅原文草』巻二・一五三)

これは仁和元（885）年、41 歳の道真が詠んだものである。この時期では、愛する我が子や、後ろ盾であり理解者でもあった父をなくし、嫌疑をかけられた道真が、寒さの中に一つ咲き残っている菊を見て、自ずから自分のことと重ね合わせている。詩人はこの「残菊」の凛然たる君子の高潔から「君子は逆境に立って悲観せず」ということを悟り、不遇にある自分を励ましたのではないだろうか。要するに、「残菊」は道真にとって、単なる秋の寂しい景物ではなく、詩人の内面に入って、さらに詩人が人生を諦観するものとなる。これこそ、菅原道真が数多くの残菊詩を詠み上げ、「残菊」に深い愛情を持っている理由であろう。一方、杜甫「歎庭前甘菊花」の「明日蕭條醉盡醒、殘花爛漫開何益」と比較すれば、不遇の意を表すという点は同じでも、「開何益」という言葉から、両者は「残菊」への態度はかなり違うことが見られる。

4 中日古典詩歌における「残菊」のイメージの差異の要因

(1) 重陽節と菊の関係

「重陽」とは、旧暦の 9 月 9 日のことである。重陽節の成立時期について定説がないが、三国時代の魏の文帝に「九日与鍾繇書」に「歳往月来、忽逢九月九日。是月律中無射、言群木百草無有射地而生、惟芳菊紛然獨榮。…」[22]があり、晉・葛洪『西京雑記』の「…九月九日佩茱萸。食蓬餌。飲菊華酒。令人長壽。…」[23]、また南朝梁宗懍撰、隋杜公瞻注『荊楚歳時記』に「九月九日四民並藉野飲宴。按杜公瞻云九月九日宴會未知起於何代。然自漢至宋未

(21)菅野禮行(1988)『平安初期における日本漢詩の比較文学的研究』大修館書店、pp.272。
(22)(清)厳可均輯(1999)『全上古三代秦漢三國六朝文』中華書局、pp. 1088。
(23)王根林等(1999)『漢魏六朝筆記小説大観』上海古籍出版社、pp. 98。

改。…」[24]という記述から推察すると、少なくとも今から二千年前後も前までさかのぼることができよう。六朝末期以後、特に唐代以後、重陽の節句は人々の間で一般化し、盛んに詩文にも取り上げられるようになった。

重陽の日は菊の花が清雅な姿を見せる絶好の時期である。文人たちは、重陽の詩文を創作する際、菊と重陽との自然な関係を念頭においていたに違いない。菊も重陽にちなんで、親しみを感じさせる響きを持つようになった。また、唐・李白「九月十日卽事」の「昨日登高罷、今朝更舉觴。菊花何太苦、遭此兩重陽」(『全唐詩』巻一七九)と詠まれるように、9 月 9 日の重陽と、その翌日の小重陽とを合わせ、「兩重陽」という。これについて、清・孔尚任『節序同風録』「九月九日」に「次日賞殘菊曰小重陽十九日再賞曰展重陽」という記述があることからも、残菊も重陽と切っても切れない関係があることが端的にあらわれているといえよう。とはいえ、「小重陽」と「展重陽」に関する記録がかなり少ないことから、これらは「重陽節」と違って、一般的な風習ではなかったようである。また、中国唐詩に見える「残菊」は、菊がもっとも脚光を浴びる日である重陽節が終わったあとのものとしてのイメージを含有しているため、盛りの時期を過ぎたもの、ひいては存在価値のないものの哀れさを表すのである。ここから、古代の文人たちは菊と重陽の関わりを重要視したこともうかがえよう。

日本側はどうであろうか。桜井満氏は日本の節句について、以下のように指摘している。

> 日本ではすでに奈良時代に「節日」は定められていた。即ち正月一日(元日)、七日(白馬)、十六日(踏歌)、三月三日(上巳・曲水)、五月五日(端午)、七月七日(七夕・相撲)、十一月大賞の日を「節日」としている(養老雑令)。天皇が出御して宴会を賜ったので、「節会」というようになる。平安時代になって平城天皇の御代に九月九日の宴が催されるようになる。平安時代には「五節会」が定められている。それは「元日」、「白馬」、「踏歌」、「端午」、「豊明」の五つの節会であって、いかにも宮廷儀礼としての「五節会」である。江戸幕府が制定したという「五節供」は、正月七日の「人日」、三月三日の「上巳」、五月五日の「端午」、七月七日の「七夕」、九月九日の「重陽」である。[25]

(24)前掲書『漢魏六朝筆記小説大観』、pp. 1059。
(25)桜井満(1993)『節供の古典―花と生活文化の歴史』雄山閣、pp. 8。

上述から、重陽節は平安朝にあまり定着していないことがわかる。また、山中裕氏も「伝来当時から重陽はあくまでも宴会であって、節会ではない」[26]と指摘していることから、菊は重陽の節物より宴会の題材と言ってよい。そして、中国のように、一般の人々まで重陽節は親しまれてはおらず、重陽は平安貴族などの上流階層に属する人々特有の文化にすぎない。平安朝の詩人たちは中国の「重陽宴」を真似して、賦詩しただけでなく、重陽節を過ぎても、「残菊宴」もしばしば主催した。そのため、重陽節によって触発された望郷・羈愁など、中国の残菊詩によく現れるイメージは日本側にあまり見えない。そこから、王朝文人たちは9月9日という時期と重陽節と関連付けた認識はもっているものの、中国文人のように、重陽節に含まれた深い意味を充分に理解し、詩文に詠み込ませることはない。その上、前述の如く、中国側は9月10日を「小重陽」、9月13日を「展重陽」と命名していることから、「重陽」をより重視することがわかる。なお、日本側は9月9日の重陽宴以外、その後に開催された菊の宴を例外なく「残菊宴」と名付けた。ここから、中日両国における重陽への認識の差はかなり大きいことを裏付ける。

(2) 宗教信仰の差異

道教は、中国民族の固有の生活文化のなかの生活信条、宗教的信仰を基礎とした、中国の代表的な民族宗教である。それは漢時代以前の巫祝信仰や神仙方術的信仰および民衆の意識などが基盤となって、漢代に黄老信仰が加わり、おおむね後漢末から六朝時代にかけて形成されたものである。その後、南北朝から唐・宋代にかけて支配層にも支持され全盛を極めた。唐代では特に道教を重んじている。唐室の道教信奉策のために、教会道教の教域は確実に中国全土に広まった。

道教の神仙方術的信仰とは不老長寿を求めることと仙道を修業することである。西晋・傅玄の「菊賦」に「服之者長寿、食之者通神」[27]などとあるように、菊は不老長寿をもたらす「仙薬」として、道教の思想と重なっている。また、9月9日の「重陽」は奇数を陽の数として尊ぶ道家思想とも合致して、宋・陳元靚『歳時廣記』に「千金方常以九月九日取菊花作枕袋、枕頭、大能去頭風、明眼目」[28]とあることから、重陽節と菊は密接に関連させる根源は

(26)山中裕(1972)『平安朝の年中行事』塙書房、pp. 238。
(27)前掲書『全上古三代秦漢三國六朝文』中華書局、pp. 1717。
(28)宋・陳元靚『歳時廣記』巻三十四、『文淵閣四庫全書』・史部・時令類による。

道教であると考える。これによって、道教を信仰する唐代の文人たちは、自然と９月９日の菊を詩文に詠み込んだ。そして、「残菊」を鑑賞する９月 10 日の「小重陽」、または９月 13 日の「展重陽」は、９月９日の重陽節のように社会共通的な行事とならなかったように思われる。

唐王朝は仏教より道教を重視するのに対して、平安時代の日本は約 400 年間にわたって仏教が主流を占めたのである。６世紀ごろ、仏教は中国より朝鮮半島を経由して日本に伝えられた。

平安時代になると、仏教は貴族の帰依と保護を受け、寺院の造営、祈祷や法会が盛んになり、貴族からの出家者も多かったところから、一般に貴族仏教ともよばれる。また、それがしだいに民衆化していくなかで、仏教思想が当時の文学などに大きく影響していた。特に「諸行無常」という仏教思想は平安文学に深く浸透した。

「諸行無常」は常ならざること、移り変わってすこしもとどまらないこと、生滅変化することを意味する。「残菊」は「諸行無常」という無常観と重ねられて、仏教思想の現れであるといえよう。それゆえ、仏教信仰に支えられている王朝文人たちは「残菊」によって、菊の変色という無常の美への賞美と、愛情などのはかなさという人生への諦観を表現したのである。

(3) 美意識と自然観の差異

① 中国古典文学における「悲秋」

紀元前３世紀ごろ、楚・宋玉「九弁」に「悲哉秋之為氣也、蕭瑟兮草木搖落而變衰」(29)と歌われている。こうした表現を濫觴として、秋の愁いは、漢代以降詩歌の世界で普遍化し、「悲秋」観念の基調を定めた。

唐代では、経済の高度的な発展とともに、人々の行動が比較的広がった。そして、羈旅の遊子、あるいは異郷にひとり暮らしている人々は、悲哀の色が濃い秋に触発された望郷の愁いを大いに詠み込んだのである。その中で、彼らの旅愁をひきおこす媒介には必ず重陽節がある。旅人は、重陽の日に、満開の菊を見ると、自分だけが欠けているという感じを覚えるのである。まして、残菊の無残な姿はどうして堪えられよう。中国の残菊詩に詠まれた羈愁や別離の悲しみは、例外なく秋という悲愁の季節と重ね合わされる。この

(29)『楚辞』・巻八・宋玉・「九辯」に「悲哉秋之為氣也！蕭瑟兮草木搖落而變衰、憭栗兮若在遠行、登山臨水兮送將歸、泬寥兮天高而氣清、寂寥兮收潦而水清、憯淒增欷兮薄寒之中人、愴怳懭悢兮去故而就新、坎廩兮貧士失職而志不平、廓落兮羈旅而無友生」とある。

ような意味で、「残菊」詩の共通の主題は「秋の愁い」であると理解できよう。

そもそも、菊は季節を告げるという実用価値があるゆえ詠まれるのである。古代中国人は、植物そのものを意識的に賞美するまで発達していなかった。彼らにとって、その美的な対象とは、人々の憧憬し理想するもの、その心情の好みに適い、強い共鳴、共感を呼ぶもの、それらをわがものとし、自らがそれと一体になることを切に願うもの、あるいは人々を衷心から悦楽させ、生きがいを感ぜしめる力をもつものである。(30)「違時而見珍」(31)の菊は万物凋落の秋という季節において、霜中に花を咲くという生命力の強さを示す。これによって、人々は生きがいを感じ、そのさびしい心も慰められ、美的な感動も与えられた。このように、菊花そのものの美より、人々はその理想的な美しい相に視線を集中するようになっていた。なお、残菊は、実生活とあまり密接な関係を持たないうえ、理想とする菊の美的イメージと合致しないのである。それゆえ、唐代の詩人たちはあまり詠まれたことがなかった。

② 日本古典文学における惜秋

日本人は古来から花盛りの眺めより落花の風情に一入の美を認めた。これについて、ドナルド・キーンが「クライマックスは、物事の初めと終りよりもさらに興味がないことである。それは想像の余地を与えてくれないからである。満月や、今は盛りの桜の花は、三日月や、花の蕾を想像させない。だが三日月や蕾（あるいは欠けてゆく月や散り行く花）は、満月や、盛りの花を想像させるのである」(32)と指摘したように、余情を重んじ、何か心に触れるものを感じるのは日本人特有の美意識である。そして、秋は万物凋落の季節であるが、日本人は、うつろいゆくもの、はかなく散っていくものに感動するのである。桜への偏好はこれゆえである。「残菊」は、生命の変貌をじっと見つめるという日本人の美意識によるものである。菊の花が移ろっていく間に、思わぬ色の変化の美しさを発見することができ、想像力もいっそう広げてゆく余地を許すのであろう。

前章に見られた「残菊」のイメージは、悲しくマイナスのものよりも、大切にしたいという愛惜または賞美する作がほとんどである。王朝文人にとって、「残菊」は、無残にうちしおれて残った菊花というよりも、むしろ、寒

(30)笠原仲二(1982)『中国人の自然観と美意識』創文社、pp.264。
(31)(明)王象晋撰、伊欽恒詮釈(1985)『群芳譜詮釈・花譜小序』農業出版社、pp. 224。
(32)ドナルド・キーン(1990)『日本人の美意識』東京：中央公論社、pp.19。

気厳しい霜中に毅然として花咲かせる、けなげで孤高な美質を象徴とするといえる。このように、こよなく愛好する切実な心情の根底に、実質的には秋の尽きるのを惜しむ、「惜秋」の思いを詠むのである。

(4) 文芸理論の差異

① 中国の詩言志と比徳説

「詩言志」という詩論は中国古代詩文において、もっとも本質的な理論と言える。これについては、『尚書・堯典』に「詩言志、歌永言。声依永、律和声。」[33]とあるのが初出であり、さらに『毛詩大序』に「詩者、志之所之也。在心為志、発言為志。」などはこの詩論を発展したものである。「詩言志」とは、詩を詠むことによって、作者の志向、懐抱を表すという意味である。また、鈴木修次氏が「自然を詠じたあとには、それとの対比で人生についての見解をつらねるか、あるいは、その自然をどう理解するかという思想が説かれるのでなければ、一篇の詩にはならない」[34]と指摘したように、事情・物事へのありのままの描写、抒情より、作者がそこから触発された思想、志向という深層あるいは高いレベルに昇華するものはさらに重要である。

こういう文学理念は植物観にも大きな影響を与えた。古代中国の人々は花の持つ特質を詩に表現し、己の心を託していた趣がある。屈原(前 343-前 277？)の句に、「朝飲木蘭之墮露兮、夕餐秋菊之落英」というものがある。これについて、王逸の『楚辞章句』に「英、華也。言己旦飲香木之墜露、吸正陽之津液;暮食芳菊之落華、呑正陰之精蕊、動以香淨、自潤澤也」[35]、また張銑は「飲香木之露、食秋菊之花者、取其香潔以合己之徳」[36]が指摘する。すなわち屈原は、菊の香り・潔さと自分の徳と合一した。東晋の詩人陶淵明からは、菊の品格を人の美徳に喩えるという比徳思想が、詩文に詠まれるようになった。唐代になると、菊の人格象徴はひとしお顕著になった。唐・陸贄『文言』に「菊擅陰陽之和氣、受天地之淳精。不失其時、比之君子之守節；無競于物、同志士之不爭。行道者象之足以建德、立身者取之足以作程。淳和自守、芳潔自持」[37]とあり、菊は高尚な品格を備える君子と見られ、宋・周敦頤は「菊隠逸者也」と述べ、その潔さが孤高の隠者に比せられ、別名を「隠

(33)顧頡剛・劉起釪校注釈(2005)『尚書校釈譯論』(第一冊)中華書局、pp.192。
(34)鈴木修次(1980)『中国文学と日本文学』東書選書、pp.61。
(35)(漢)王逸『楚辞章句』巻一、『文淵閣四庫全書』・集部・楚辞類。
(36)(南宋)呉仁傑『離騒草木疏』巻一、『文淵閣四庫全書』・集部・楚辞類。
(37)(清)陸廷燦『藝菊志』巻3『雑著』、『四庫全書存目叢書』子部第 81 冊。

君子」ともいうようになった。つまり、外見より、その寒風と戦って咲き続ける崇高な性格が大事にされているのである。

このように、菊の「不老長寿」「高節」「隠遁」という品格を強調するあまり、植物としての特性はしだいに無視されていった。詩歌における菊の詠み方も類型的になった。残菊の場合になると、外見はともかくも、精神面から詩人たちにうつろいやすいイメージを与えた。また、同じく寒さに当たっても色を変えない松と併称する「松菊」は、隠者の住まいを象徴する言葉である。そして、菊が変色することも比徳思想という理念と合わず、残菊自体を正面からとりあげることなく、存在価値のないマイナスのイメージを賦与された。

②日本的な抒情―もののあわれ

「もののあわれ」は、本居宣長が『源氏物語玉の小櫛』（1799 年）を通して指摘した理論である。「もの」は客観的な対象であり、「あはれ」は主観の感情と一致する所に生ずる調和的情趣である。また、「あはれ」は古く記紀の歌謡などから感動を表す語として用いられているが、しだいに美意識も表すようになる。平安時代には調和のとれた美に感動することが多くなり、その場合しめやかな情緒を伴い、独特の優美な情趣の世界を形成するようになって、理念化されたとみられる。この理念は平安朝の文学だけでなく、後世の文学にも大きな影響を及ぼした。「残菊」にも「もののあわれ」という平安時代の文学をとらえる上での文学理念・美的理念が内含されていると考える。

また、中国における科挙制度によって人材を選抜することと違って、平安朝は一系の天皇を頂点として藤原氏の摂関政治が行われた時代である。政治的な場から疎外された文人たちは政治的な志をうたうことは少なく、「もの」によって「あはれ」を引き起こすという抒情的な詠作が多い。そして、そもそも単純さと物事の天然自然を好む古代の日本人はおのずから残菊に親近感を持っている。そのイメージも、菊そのものに関心をもって、咲き匂い、そしてうつろっていく菊の花が純粋に美的な自然鑑賞として享受されるのである。

5 まとめ

小論は「残菊」をめぐって、主に唐代と平安時代における漢詩の交流の一端を論じてみた。ここから、中日古典漢詩における「残菊」への偏好の差が見られる。そのほか、日本側は中国側の「残菊」からの受容と変容を探求しようとしても、その背後に潜んでいる自然風土、社会、歴史、宗教、文化などの要素が複雑で、容易に把握することができない。また、紙幅の制限で、本稿は唐代と平安時代以外の作品を触れていなかったうえ、資料と学力の不足でいろいろと欠点や誤りがあるので、これらを今後の課題として引き続き研究したい。

参考文献：

[1]川口久雄校注.日本古典文学大系 72 菅家文草・菅家後集[M]. 東京：岩書店、1966.

[2]小島憲之校注.日本古典文学大系 69 懐風藻・文華秀麗集・本朝文粋[M]. 東京：岩波書店、1986.

[3]大曾根章介、金原理、後藤昭雄校注.本朝文粋[M]. 東京：岩波書店、1992.

[4]本間洋一注釈.本朝無題詩全注釈[M]. 東京：新典社、1992～1994.

[5]山中裕. 平安朝の年中行事[M]. 東京：塙書房、1972.

[6]鈴木修次. 中国文学と日本文学[M]. 東京：東京書籍株式会社、1987.

[7]笠原仲二.中国人の自然観と美意識[M]. 東京：創文社、1982.

[8]ドナルド・キーン. 日本人の美意識[M]. 東京：中央公論社、1990.

[9]桜井満. 節供の古典―花と生活文化の歴史[M]. 東京：雄山閣、1993.

[10]菅野禮行.平安初期における日本漢詩の比較文学的研究[M]. 東京：大修館書店、1988.

[11]渡辺秀夫.詩歌の森―日本語のイメージ[M]. 東京：大修館書店、1995.

[12]小島憲之. 上代日本文学と中国文学（下）[M]. 東京：塙書房、1988.

[13]本間洋一. 王朝漢文学表現論考[M]. 大阪：和泉書院、2002.

[14]逯欽立輯校.先秦漢魏晋南北朝詩[M].北京：中華書局、1983 .

[15](明)張溥. 景印文淵閣四庫全書・漢魏六朝百三家集[M].中国台北：台湾商務印書館、1986 .

[16](清)彭定求撰、中華書局編輯部点校.全唐詩(増訂本) [M].北京：中華書局、1999.

[17](清)嚴可均校輯.全上古三代秦漢三国六朝文[M].北京：中華書局、1999.

[18]高兵兵.菅原道真詩文における＜残菊＞をめぐって―日中比較の視角から[J]. 国際日本文化研究センター『日本研究』、2006(32).